

の第三句は他の諸本が「モカリフネ」と訓んでいるのに対し、『万葉集抄』だけがこのような訓になっている。「海藻」の二文字で「モ」と訓むことに気付かず、本文に引かれて「ウミモ」の訓を付したと考えられる例である。

また、第四句から五句についても諸本「アマコキイツラシ」（古葉略類聚鈔のみ「アマコキイテ、ミレハ」とある中、「アマコキイテ、ツラハカケルミユ」とあるのが不審である。しかしながら元暦校本の訓を見ると「こきいつらし」の箇所、

こきいつらし

のように「つら」の部分が「天(て)」の草体と似ており、そこから「いて、」の訓が生じてしまったとも考えられないだろうか。

竹下豊は『万葉集抄』所収の歌の中に、卷二十の四三三二番歌と四三三三番歌が融合して書かれていることから、このような目移りによると思しき融合の原因として、『万葉集』―その本文の正確さには疑問もあるが―を傍らに置いて行なわれたことを示唆するものであろう」と述べ、また二首融合の現象は、『万葉集抄』の依拠した『万葉集』が「片仮名傍訓の体裁であったのではないだろうか」と指摘している<sup>5)</sup>。

『万葉集抄』の親本が片仮名傍訓であったにしろ、その中に含まれる訓の独立異文がもともとは平仮名別提のものを参照しており、そのくずし字の判読を間違ったために生まれたものであった可能性もある。なおこの点については推測の域を出ないため、今の段階では、万葉集抄独自の訓であっても、意図的な変更のみではなく、当時の書体等による何らかの原因などが想定される場合のあることを述べるにとどめておく。

## 六 結び

以上、『万葉集抄』の巻六から巻九までの本文について検討し、元暦校本や藍紙本とはやや系統を異にし、類聚古集、広瀬本、また伝壬生隆祐筆本や近衛

本とも類似する箇所があるのを見てきた。また独立異文のものでも『万葉集抄』の親本にその原因を求めることができる可能性について述べた。

万葉集の写本は当然現存するものだけでなく散佚したものもあり、『万葉集抄』所収の歌について、現存古写本との比較だけで検討することは限界がある。しかし仙覚以前の注釈書である『万葉集抄』の存在は貴重であり、現存しない万葉集古写本の本文の姿を探る手がかりとなるであろう。

## 注

(1) 宮内庁書陵部蔵の万葉集抄については佐佐木信綱『秘府本万葉集抄』(一九二六年七月、古今書院)によって紹介がなされ、冷泉家時雨亭文庫蔵のものは、冷泉家時雨亭叢書第三十九巻『金沢文庫本万葉集 卷第十八 中世万葉学』(一九九四年十月、朝日新聞社)がある。竹下豊の解題が詳しい。

その他、『万葉集抄』について論じたものに、藤平泉「宮内庁書陵部蔵『万葉集抄』について」(『古典論叢』第十八号、一九八七年八月)、浅田徹「秘府本万葉集抄について」(『和歌文学研究』第五十九号、一九八九年十一月)、後藤祥子「秘府本万葉集抄」の作者」(『国文目白』第二十五号、一九八六年二月)などがある。

(2) 拙稿「万葉集抄の本文について」奈良工業高等専門学校研究紀要第四十四号、二〇〇九年三月。

(3) 古写本の確認として、以下の本を参照した。  
「藍紙本万葉集」日本名筆選18 一九九四年二月、二玄社。  
「元暦校本万葉集」第一～四冊 一九八六年六月、勉誠社。  
「類聚古集」縮刷新版、一九九二年七月、臨川書店。

(4) 万葉集の「意改」については「万葉集写本の意改」(『文学』第四十二巻二号、一九八〇年二月)をはじめとする木下正俊の論を参照されたい。

また竹下豊も『万葉集抄』において、意図的な変更のあることを「平安後期の万葉研究―『万葉集抄』をめぐる―」(『講座 平安文学論究 第十輯』一九九四年十二月、風間書房)において論じている。

(5) 注(4) 竹下論文、三九頁、四〇頁。

みにかへりこむ 藍類  
 みてかへりこむ 壬  
 みてかへりこむ 文  
 ミニカヘリコ □ 古  
 ミニカヘリコム 紀  
 ミテカヘリコム 宮細西

と、藍紙本や類聚古集ではなく伝壬生隆祐筆本や金沢文庫本と一致することも注目されるが、とにかくこの「而」字が訓に引かれた意改であることは間違いない。その他、

⑱ 朝名寸梶音所聞三食津国野嶋乃海乃船二四有良信 (6・九三四)

海子・元類  
 海○乃 紀  
 海子乃 古近宮細

大矢本は「乃船」の二字を脱し、左に記す。また紀州本が「子」の字を後で補っていることから、この箇所、親本に何らかの原因があった可能性もある。

五 訓について

訓についても『万葉集抄』の独立異文の箇所がいくつか見られる。

⑮で歌本文を取り上げた例、

⑲ 物部乃石瀬乃杜乃霍鷲今毛鳴奴山之常影尔 (8・一四七〇)

第四句の訓は諸本、また『袖中抄』にも「イマモナカヌカ」とある。「未然形+ヌカ」で「〜してくれないか」という希求表現となるが、上代特有のものである。ところで『和歌童蒙抄』には「イマモナカナム」と『万葉集抄』と同じ訓になっている。希求を表す終助詞として中古以降よく用いられた「ナム」に置きかえられたのであろう。おそらく『万葉集抄』成立当時、この歌がその

ようにも流布していたことが想定される。

⑳ 泊瀬女造木綿花三吉野瀧乃水沫開来受屋 (6・九二二)

この第五句の訓、

さきにけらすや 元  
 ささ、たらすや 類  
 サキヌケラスヤ 紀  
 サキキタラスヤ 古宮細

となっており、『万葉集抄』の訓は独立異文となる。しかし、類聚古集の訓を見ると、



と「、た」の草体部分が「多」の草体



(伊地知鉄男編「仮名変体集」昭和六〇年四月一日改訂11版 新典社)

と極めて類似しており、そこから「タ、ラスヤ」の訓が生じてしまった可能性はないだろうか。もちろん単なる前後の目移りとも考えられ、西本願寺本も「サキタラスヤ」とあり、二文字目の「タ」を「キ」と訂正しているが、くずし字からの誤写という可能性も否定はできない。他にも例えば、

㉑ 磯立奥辺平見者海藻苺舟海人擲出見之鴨翔所見 (7・二二二七)

写本と一致するものは多い。以下、その点について検討する。

⑪ 吾情湯谷浮蓴邊尔毛奥尔毛依勝益士 (7・一二五二)

湯谷絶谷 元類紀

湯谷絶・古

湯谷・広

と元暦校本、類聚古集は「絶谷」の文字があるが、『万葉集抄』はこの二文字を欠く。しかしながら広瀬本とは同じ本文となる。また古葉略類聚鈔との関連も考えられる。

⑫ 真木乃於上零置有雪乃敷布毛所念可聞佐夜問吾背 (8・一六五九)

於尔 類紀広宮細西

於上 近矢京

多くの写本が「於尔」としている中、近衛本、また大矢本や京都大学本と一致している。近衛本以下は仙覚本の中でも「文永本系」とされるものであるが、それらと一致するのは興味深い。他にも近衛本と一致するものが見られる。

⑬ 三河之瀨瀬物不落左提刺尔衣潮干児波無尔 (9・一七二七)

川 藍壬類古紀広文西陽矢京

河 宮細近古

多くの写本が「川」字を採る中、近衛本や古葉略類聚鈔と一致している。このようなものについては、近衛本に散佚した古写本の本文が紛れ込んでいる可能性もある。

⑭ 金風山吹瀨乃響苗天雲翔鴈相鴨 (9・一七〇〇)

鴈相鴨 ・相鴨

壬紀文宮細 藍類古春広

次点本のうち藍紙本以下「鴈」の字を欠くのに対し、伝壬生隆祐筆本や紀州本、金沢文庫本が『万葉集抄』と一致している。

以上のように、類聚古集などの次点本と一見異なる本文に思われる場合でも、他の次点本あるいは江戸時代の写本(おそらく次点本の本文が残っているもの)と一致しており、現存しない次点本の存在を想定してもよいのではないかと。

#### 四 独立異文の例

では次に、独立異文の例を挙げて検討を加えることとする。

⑮ 物部乃石瀨乃杜乃霍鷲今毛鳴奴山之常影尔 (8・一四七〇)

他の写本は第三句「霍公鳥」と書き、類聚古集は「鳥」の字を脱する。しかし校本万葉集や活字に翻刻されたものだけを見ていると気付きにくいことであるが、「霍公鳥」の当時の書体として「公鳥」の二文字を融合させたような表記があり、例えば類聚古集の当該歌の前の部分、一四六六番歌から一四六九番歌にかけて「霍鷲」に近いものが見られる。また先ほど④の例として取り上げた巻九の一七五六番歌も、諸本が「霍公鳥」とする中、『万葉集抄』は「霍鷲」としており、類聚古集も「公」と「鳥」が融合した書体となっている。この『万葉集抄』筆写者の書き癖と見ることできる。

次に先ほど②で訓の異同を取り上げた、

⑯ 山跡庭間往歟大我野乃竹葉荊敷廬為有跡者 (9・一六七七)

第三句の「乃」字、諸本全て「之」に作り、『万葉集抄』の独立異文である。特に訓に影響するものでもなく、この種の意改④と思われる例は他にも見られる。

⑰ 朝開擲出而我者湯羅前釣為海人乎見而反将来 (9・一六七〇)

この第五句の「而」は諸本になく、また訓は、

系諸本は「延」としており、紀州本は「しんによう」に旁「呂」を記したような字になっている。他は、

返 類  
引 古葉略類聚鈔（略称「古」）  
近 広

であり、やはり類聚古集との近さが考えられる。

藍紙本は桂本につぐ古写本であり、その本文は校訂作業において尊重されるものであるが、元暦校本と同様、『万葉集抄』の本文とはやや系統が異なるようである。

### 三 類聚古集その他諸本との比較

それでは次に、類聚古集をはじめとする次点本、また仙覚本系とされる諸本との比較も含めて『万葉集抄』の本文を検討することとする。まず類聚古集との近さがうかがわれる例をみておく。

⑥ 烏玉之夜乃深去者久木生留清河原尔知鳥数鳴（6・九二五）

冷泉家時雨亭文庫蔵本ではこのように第三句の「木」の字を後から補ったのか小字で記しているが、諸本のうち類聚古集だけがこの文字を脱しているのである。次に、

⑦ 山毛世尔咲有馬醉木乃不悪君乎何時往而早将見（8・一四二八）

この歌は「忍照難波乎過而……」という長歌の一部であるが、類聚古集には卷十三「山路」の部に、

忍照難波乎過而打靡草香乃山乎晚尔吾越来者

と長歌の前半が収められ、卷一の「馬酔木」の部に、この「山毛世尔」以下が挙げられている。紀州本や広瀬本も「山毛世尔」以下を別行としており、おそらくそのことから二首の歌と認識されたのであろうが、別の歌と認識している類聚古集との関係は近いであろう。

また、歌の作者について、

⑧ 左少弁巨勢宿祢奈磨家宴哥（6・一〇一六）  
宿・奈麻呂 元広  
宿祢奈磨 類紀  
宿弥奈麻呂 古

と元暦校本や広瀬本が「祢」の字を脱しているのに対し、類聚古集などとは類似している例がある。また、やはり人名の例、

⑨ 紀女郎贈大伴家持哥（8・一四六一の前行）

この歌の作者、神宮文庫本以下仙覚本系統のものでは「大伴宿祢家持哥」と「宿祢」の字がある。元暦校本はこの卷八を欠き、また類聚古集は歌の前行に「紀女郎攀合歡花」とのみ掲げてあり比較できないのが残念であるが、紀州本、広瀬本が『万葉集抄』と同じであり、また、春日本（略号「春」）に「紀女郎贈大伴家持哥」の九文字がかすかに見えるのが注目に値する。さらにこの歌の本文、

⑩ 書者咲夜者恋宿合歡木花君将見哉和氣佐倍尔見（8・一四六一）

諸本が最後を「見代」としているのに対し、類聚古集のみが『万葉集抄』と同じく「代」の字を欠く。『万葉集抄』は書写態度として歌本文の文字を一字脱することがままあるが、ここは類聚古集との一致に注目しておきたい。また同じ第五句の「倍」字については書写年代順に、

陪 類  
信 紀  
倍 広宮細西、陽明文庫本（略称「陽」）、近衛本（「近」）  
となっており、類聚古集と相違するが、広瀬本とは一致しており、紀州本にもその親本が「倍」に近いものであったことがうかがわれる。  
このように、類聚古集と一致しない場合でも、広瀬本あるいは他の非仙覚本

いはその流風を伝えた人といわれる。本文については元暦校本と同系といわれている。そこでまずこの藍紙本と『万葉集抄』の比較を試みる。一見して訓において藍紙本とは一致せず、他の次点本と一致するものが目に付く。以下にその例を挙げるが、仙覚本系統のものについては、煩雑を避けるため、参考になる諸本のみとする。

① 朝裳吉木方往君我信土山越監今日曾雨莫零根 (9・一六八〇)

第一句の訓については、

あさもよし	藍
あさもよき	伝壬生隆祐筆本 (略称「壬」)
アサモヨキ	類聚古集 (略称「類」、通常は平仮名別提の写本であるが、本歌は片仮名別提)、紀州本 (略称「紀」)
アサモヨヒ	広瀬本 (略称「広」)
アサモヨイ	神宮文庫本 (略称「宮」、細井本 (略称「細」)
アサモヨイ (「イ」は青)	大矢本 (略称「矢」)、 京都大学本 (略称「京」)

となっており、藍紙本・類聚古集とは異なり、広瀬本や伝壬生隆祐筆本の右部分の書き込みと一致する。なお第三句の訓も諸本「マツチャマ」とあり、『万葉集抄』のみが「我信土」とあるのは、本文に合わせたものと考えられる。このように、本文に対応して付されたと思しき独自の訓も見られる。

② 山跡庭間往歎大我野乃竹葉苳敷廬為有跡者 (9・一六七七)

の第四句 (「タカ」は「タケ」の交替形) も、

たかはかりして	藍
たかはかりしき	壬
さ、かりしきて	類
タカハカリシク	広 (「ク」は後補)
タケハカリシキ	紀
タカハカリシキ	宮細

と、藍紙本・類聚古集とは一致せず、伝壬生隆祐筆本、また神宮文庫本以下の仙覚本と一致する。

③ 春草馬昨山自超来奈流鷹使者宿過奈利 (9・一七〇八)

第三句の訓の異同は、

こえくなる	藍紀宮細
こえくれば	類
こえくなる	壬
コエケルバ	広
コエケルバ	宮細

となっており、類聚古集とは異なり藍紙本と一致する場合は、伝壬生隆祐本とも類似する。また、第五句の訓は、

やとりすきぬなり	藍
やとりすくなり	類
やとりすきぬなり	壬
ヤトスキヌナリ	宮細

と、やはり、藍紙本ではなく類聚古集と一致している。

本文については、藍紙本が類聚古集あるいは広瀬本と異なる例が少なく、適当な例に乏しいが、例えば、

④ 搔霧之雨零夜乎霍鶯鳴而去成何怜其鳥 (9・一七五六)

の第五句の「何」の字について

阿	藍紀宮細京
何	類、金沢文庫本 (略称「文」、西本願寺本 (略称「西」)

となっており、やはり藍紙本ではなく類聚古集などと一致する。また、

⑤ 黒牛方塩干乃浦乎紅玉裾酒蘇返往者誰妻 (9・一六七二)

第四句の「返」字について、藍紙本、伝壬生隆祐筆本、神宮文庫本以下仙覚



## 万葉集抄の本文について (二)

## The Text of “Manyoshu-syo” (II)

Yuri KAGIMOTO

鍵  
本  
有  
理

## 一 はじめに

現存最古の万葉集注釈書として知られる『万葉集抄』は、万葉歌百六十八首を抄出し、注釈を付したものである。

宮内庁書陵部が所蔵する『万葉集抄』の写本については、佐佐木信綱により「秘府本万葉集抄」の名で紹介された(『万葉集叢書』第九輯)が、近年、その親本にあたる冷泉家時雨亭文庫蔵の『万葉集抄』についても影印本が上梓された。この冷泉家時雨亭文庫蔵の『万葉集抄』と書陵部蔵本を比較すると、書陵部蔵本は冷泉家時雨亭文庫蔵本を忠実に書写しようとしていたことがわかっている<sup>(1)</sup>。

万葉集の写本には、鎌倉中期の僧仙覚による校訂の影響を受けた「仙覚本」あるいは「新点本」といわれるものと、それ以前の「非仙覚本」つまりは「古点本」「次点本」とよばれるものがあり、『万葉集抄』の手沢本としては、その成立時期から当然非仙覚本のものが想定される。

前稿では、『万葉集抄』所収の万葉歌について、巻一から巻五までの本文を調査し、非仙覚本のうちでも元暦校本よりは類聚古集、また広瀬本や伝冷泉為頼筆本などと一致することが多く、現存しない冷泉本系の万葉集の本文を参照していた可能性が高いこと、また、他の万葉集の写本と同様に訓に合わせた「意改」と考えられる独立異文の例などが存在することについて述べた<sup>(2)</sup>。

そこで、本稿では、引き続き万葉集巻六から巻九までの歌について、『万葉集抄』の本文を検討し、『万葉集抄』が引用した万葉集の本文についてさらに考察を加えることとする。用例の最初に掲げる『万葉集抄』の本文については、冷泉家時雨亭文庫蔵本に拠るが、判読の困難なものについては書陵部蔵本を参照した。また万葉集の諸本については、校本万葉集その他複製本により本文を確認した<sup>(3)</sup>。

## 二 藍紙本万葉集との比較

藍紙本(略号「藍」)は、平安時代後期に書写された薄藍色漉紙の卷子本である。現存するのは巻九の大部分と、巻一・十・十八の断簡で、筆写者は藤原伊房ある